

新小岩幼稚園・未就園児クラス

アドバイザー

猪之鼻 晴子



『 おむつについて 』

子どもが言葉を話し始めること、歩き出すことよりも時期に個人差があるのが「おむつがはずれること」かもしれない。

1才半くらいから歩くのがしっかりしてきたので、おむつを取るか。

2才の夏に幼稚園・保育園入園のためにパンツにしてみるか。

3才になってから入園と同時期くらいにパンツにするか。

その子の発達とママの生活スタイルによって時期は違ってくる。

きょうだい5人はすべて布おむつだったので膨大な洗濯量だった。

新生児は1日約20回はおしっこをする。

他の洗濯物もあり、洗濯機が壊れた時、電気屋さんに機械を覗いて

「使い過ぎですね」と言われた。

6番目は出かけるときは紙おむつにした。

それでも、ひとりにつき約8,000枚×6人=4万8千枚のおむつ替えをした。

平成の時代に日本で一番おむつを洗ったのはたぶん自分だろうと思っている。

子育ての歴史はおむつ替えの歴史でもある。

長いおむつとの付き合いから結論を言うと、
おむつはずしの一番大切なことはタイミングだ。

子どもの様子を見てはさすが、

① ひとりで歩ける

② 「チー」「おしっこ」など言葉で意思を伝えられる

ができるとおむつはずしは始められる。

しかし1才前後では おしっこが出た → トイレまで我慢できる
というからだの発達がまだなので、1才半から2才代が子どもにとってもママにとっても負担のないおむつはずしの開始になる。

子どもは新生児の時からおしっこやうんちの出る不快な気分を泣いて伝えている。「おむつを替えて欲しい」と。それを根気よく私たちが替えることで「不快 → 快適」という感覚を覚えていく。これは布おむつでも紙おむつでも同じことだ。紙おむつを体験してみたが、まったく快適ではない。

おむつをつけるということは、子どもが望んでいたことではなくあくまでも育てる側の都合だということだ。2年間なり3年間なり「おしっこうんちはおむつにするもの」と毎回毎回教え込んできたということだ。だから、「はい2才になったから、もう3才なんだから」と急に何日かでトイレでできるというのは難しいことだと思う。子どものタイミングを見て、失敗するのが当たり前という気持ちで気長にはずしていくしかない。そしてトイレで一回でもできたら「一回もうけたな」と考えて一回ずつ、後戻りもありながら進めていくしかない。

今、小学校3年生、高学年でも夜だけおむつをしている友だちもいる。何人も話を聞かすが、どういうわけか？男の子ばかりである。これは幼児のおむつはずしとは話が違って、体質や日中のストレスも関係があるらしい。ママたちはみな深刻に悩んでいる。「林間学校や合宿でおむつをはくのはかわいそう」と。専門医に相談することも必要かもしれないが、その時に大事なこともやはり、ママが気長に構えることだと思う。おねしょと子ども本人の意思はまったく関係がない。「気を付けて」「がんばって」と言われても眠った身体は別物なのだ。坂本龍馬は15才までおねしょをしていたという。それでも彼が活躍する人生を送れたのは幼少時から自己肯定感を低くするような言葉をかけられなかったおかげだろうと言われている。「お前はだめだ」「ダメな子だ」という言葉を家族が言わなかったそうだ。おねしょをすることとその後生き方もまったく関係はない。子どももママも責められることは一切ない。「もしかしたら、パパもしていたかもね。」とパパのせいにもしておくのがちょうどいいかもしれない。

子どもが生意気なことを言うと「おむつ替えたの誰よ？」と心の中で毎回思う子どもたちはおむつをしていたことなど知らん顔で大きくなっていく。それまでは新しいカーペットと布団はあきらめている。

おむつはずし

- ① ひとりで歩ける・「チー」「チッコ」など伝えられる
↓
- ② 時間を決めてトイレに座らせない。
偶然出るとはあっても、自律ではなくだんだんいやがる。
↓
- ③ お気に入りのパンツなどにしてみる。
「出た」「出ちゃった」が続く。

この時期は子どもによって違う。
根気よく「出たね」をくりかえす。叱ってもまったく意味はない。
外出の時だけおむつにするなどして乗り切る。

- ④ トイレやおまるまで我慢することができるようになる。
一回できたら「一枚もうけた」と思って、後戻りしながら続ける。